

ボランティア・市民活動のコーディネーター・リーダー等推進者のための ボランティア情報

[volunteer_information]

2012
MAY

5

VOL.420

平成24年5月1日発行 毎月1回1日発行



学びの空間に集まった子ども達。笑顔が希望を感じさせる

特集

人と人とのつながりを 大切に 過疎地域を支える ボランティアな活動

02



みやぎけんせんだいしみやぎのく
宮城県仙台市宮城野区

今月の鼓動

宮城県仙台市宮城野区 「NPO法人アスイク」

被災児童の学習サポートから 支えあう社会づくりへ

仙台市内の仮設住宅の集会所で、子どもたちの学習支援を続ける「NPO法人アスイク」。「学校が被災したと聞いた時、今後は子どもたちの学習遅れの問題が深刻になると思いました」と話すのは代表理事の大橋雄介さん。

被災した子どもたちの学習をサポートしたいという思いから活動を開始し、現在は仙台市内の仮設住宅5か所で子どもたちの学習を支援、昨年11月からは宮城野区内で直営の学習支援センターを運営しています。

「子どもたちを教える学習サポーターからは、『自分たちの方が色々教わっている』という言葉も数多くもらっています」とも。

被災地のみならず、すべての子どもたちに向けて、挑戦を続けています。

●取材日/2012年4月27日

宮城県仙台市宮城野区 「NPO法人アスイク」

<http://asuiku.sendai-net.com/>

東日本大震災後に、いち早く仮設住宅での学習サポート活動、学習支援センターでの教育支援活動など、子どもたちの学習をサポートする目的で設立。低所得家庭の子どもたちの問題に当事

者意識をもつ市民や組織を増やし、それらの力を結びつけることで、「貧困の連鎖」を緩和し、「支えあう社会」をつくることを目指している。

Contents	
ホントは身近なボランティア 大阪府和泉南部岬町多奈川地区	06
突撃訪問! 隣のコーディネーター (ITコーディネータ)	
帰ってきた! あるある質問コーナー	07
保険の広場 つながって広げ続けよう! 事務局だより	08

心れあひネットワーク

社会福祉法人 全国社会福祉協議会

特集

人と人との つながりを 大切に

～過疎地域を支えるボランティア活動～



現在の全国の過疎市町村の数は776で、全国1,724市町村の45%にあたります。過疎市町村の人口は全国の人口の8.7%余に過ぎませんが、面積は57.2%と日本国土の半分以上を占めています。過疎地域のない県は神奈川県と大阪府の2府県のみであり、「過疎」は遠いようで身近な話になってくるのです。

また過疎地域の抱える課題は多岐にわたり、かつそれぞれの課題が関連していることも多くあります。

これらの課題には各県ごとの過疎地域自立促進計画に基づいた行政の施策のみならず、企業やNPO、ボランティアや地域のとりくみとして様々な分野において様々な活動が始められています。



* 過疎地域とは過疎地域自立促進特別措置法第2条第1項に規定する市町村、もしくは第33条第1項・第2項により過疎地域とみなされる地域をいう。
人口要件(人口減少率や高齢者比率・若年者比率など)と財政力要件がある。
* 総務省自治行政局過疎対策室平成22年度版「過疎対策の現況」より引用

過疎を支えるボランティア活動

外部からの力として

NPO・企業のCSRとして展開されるものが多く、環境・農業・林業・産業振興・文化伝承・まちおこしなど様々な分野にわたる。その手法もイベント的なものからワークキャンプ・ボランティアホリデー・グリーンツーリズム・地域間交流など多岐にわたる。

外部の力をうまく取り入れた、地元融合型の活動として

外部の力やノウハウを借りながら地元の青年層・勤労者層を含む住民や地元の商店や関係団体などの力を融合し、エンパワメントしながら展開されるもの。

地域内部の力を高めていくものとして

自治会や町内会、地区社協などの地縁を基盤とした組織において、住民同士の助け合い活動として展開されるもので、見守り・買い物支援・サロン活動・廃校利用・雪かき・移送など多くの活動がある。

人と人とのつながりを重視するボランティア活動

次頁から地元融合型の活動を3事例紹介しました。単に人手や資金が足りないからボランティアでなんとかしようという発想ではなく、活動そのものを楽しむ姿、活動によって地元が元気になっていく姿が見受けられます。またどの活動でも、ややすると見失われがちな人と人との出会いやつながりが重視されてい

て、そのつながりが活動や交流のひろがりや参加のモチベーションをもたらしているようでした。

過疎地域におけるこうしたボランティア活動が活発になることで、地域内の資源の活用や外部の風を取り入れることによる活性化につながり、地域力を高め地域全体のエンパワメントにもつ

ながるのかもしれませんが。また過疎の問題には行政との関わりやバックアップが不可欠になります。これまで以上に多分野・他組織での関わり・行政との関わりが求められ、地域内部だけの力・外部だけの力ではなく、時には連携し、コラボすることでさらに広がりが見られるのではないのでしょうか。

「みんなの話しで 相手の話が聞こえないくらい にぎやかです」

長野県山ノ内町
わくわく商店街実行委員長

たか そう み ち こ
高相 美智子さん



地元住民が楽しく集える “憩いのコミュニティ”

住民たちの “憩いの空間”をつくる

長野県山ノ内町は、300km²もの広大な面積を持つ町です。にもかかわらず、公共交通機関の利便性が悪いため、車で買い物等に行けない住民は「買い物弱者」として取り残されがちでした。こうした住民のお役に立ちたいと立ち上げたのが「わくわく商店街」だったのです。

月に2回、町内の住民活動センターを活用し、住民が町の中で集まり、語り、買い物を楽しめるコミュニティを運営しています。併設されているデイサービスの利用者も、この日を楽しみにしている方が多いようです。また、同施設内にある喫茶店(障害者の就労支援事業所を兼ねる)は町では数少ない喫茶施設ということもあり、住民が少しお洒落をして訪れるスペースとなっています。

買い物の場としてはもとより、交流の場としても定着しており、ボランティアが持ち寄った手作りの漬け物や煮物などに舌鼓を打ちながら会話に花を咲かせます。

ここに来れば誰かと会える、 語れる楽しみ

買い物をする手段としては宅配サー



ビスもありますが、住民には自分の目で見て、選びたいという希望があります。増して、友人や知り合いと一緒に買い物が楽しめるこの場所は、住民にとってかけがいのない場所なのです。

誰かと話したい。だから、集まる。特に高齢者が楽しみにしていることは理解していますから、私たちボランティアも妙にかしこまったりせず、一緒になって楽しむことを心掛けています。

「いる人、できる人だけでやろう」「やらされているのではなく、一緒に楽しもう」が合い言葉。常時7~8名のボランティアが、ご近所さんとして、集まった方々のお世話をしています。

効果的な役割分担で、 お年寄りの 生き甲斐を支える

もちろん、私たちボランティアだけでは、こうした機会を設けることはできません。実行委員会のメンバーには適材適所で支えてい

ただいています。

商工会の皆さんには出店者の調整、社協の皆さんにはPRをお願いするほか、デイサービスの送迎車を活用した送迎等で協力いただいています。

こうしたご助力のおかげで、私たちはお茶飲みサロンでのおもてなしや、季節の手作り品作成コーナーに注力することができますのです。

現在のところ、1回あたり70~80名の来場がありますが、まだまだ知名度を上げられる余地があります。1回あたり150名の参加者が集まるように頑張っていきたいですね。高齢者だけではなく、障害のある方、子育て世代など、いろいろな人が集まれる場にしていきたいと思っています。

〈取材日：平成24年5月9日〉



「わくわく商店街」での買い物を楽しむ住民の方々



「いろいろな人が 来てくれることで町が 元気になってきました」

島根県出雲市鵜鷺(うさぎ)げんきな会 事務局長 **あべ いさむ**
安部 勇さん

地元の魅力を磨き、 観光客に来てほしい

人口240人。
高齢者比率60%を超える地区

一山向こうには年間観光客数250万人を誇る出雲大社がある島根県出雲市大社町。「鵜鷺(うさぎ)げんきな会」がある鵜鷺地区は、鵜峠(うど)地区と鷺浦(さぎうら)地区の頭文字をとった、小さな港町です。過疎化が進み、最盛期には1,700人以上いた住民も現在は240人にまで減少。高齢者比率は60%を超え、美しい町並みを支える古民家の半数以上は空き家となっています。

私は38年間大阪で勤務していました



が、早期退職を機に鵜鷺に戻り、「鵜鷺げんきな会」を6年前に立ち上げ、仲間と共に地区の活性化に取り組んでいます。

会員の平均年齢も65歳を超えていますが、古くから銅が掘られ、江戸から明治にかけては北前船の寄港地として栄えたこの地区に、賑わいを再びという思いをもって活動しています。

地元の環境を活かし、 都市との交流を促進

当地を活性化するためには、観光など都市との交流が欠かせません。そこで、個性を活かした都市との交流基盤作りの一環として、古民家4軒を改装し、宿泊施設として整備しました。

鵜鷺の良さを知ってほしいと開催している「体験ツアー」には常に15～20名に参加いただき、美しい鵜鷺の海を堪能していただいています。リピーターを含めると230

名以上に参加いただき、平均宿泊日数は3日間ですので、延べ宿泊日数は600日間を超えています。

参加者をもてなすために考案した塩焼きイベントも盛況で、地区の高齢者の協力もあって、参加者は400名以上。結果、「鵜鷺の藻塩」として商品化し、北海道や沖縄からお求めになるお客様も増えています。

その他、地元の漁師さんの船を借りて、夕日を楽しむイベントを開催するなど、楽しんでいただきながら、鵜鷺の自然を体感していただいています。

だんだん地元が変わってきた

こうした活動をはじめてから、これまでに7人の方が鵜鷺地区に転入してきました。中には古民家を活かしてコミュニティカフェを開いた方もいます。

また、イベントが功を奏したのでしょうか、全国ネットのTV局が取材のために当地を訪れたことも5回。知名度が上がるにつれ、地元の雰囲気全体が変わってきているように思います。観光客が増え、若い方も年々増えているのです。

出雲大社には毎年250万人の観光客が参拝されますから、そのうちの10万人を目標に、観光客の動員を狙っています。鵜鷺地区の良さを感じていただき、ここに暮らす住民が増えてくれるのであれば、こんな喜びはありません。

〈取材日：平成24年5月10日〉



子どもたちの塩焼き体験

「学生と地元を つなぐことで、 新しい可能性が生まれます」

鳥取県特定非営利活動法人 学生人材バンク 代表理事 **田中 玄洋さん**



地元の住民との交流を楽しむ学生たち

去作業、鳥獣被害対策などに、外部の若い力を必要としていたのです。

学生たちに学びになり地域の役にも立つやり方になる。今では県からの委託も受け学生たちのネットワーキングに注力し、県内学生数約5,000人中、1,600人にも及ぶ学生ネットワークを構築。年間500人以上の学生たちを農村の現場に送り込んでいます。

3年前には農業の後継者として卒業生を紹介し、今ではその町で5番目に大きい耕地面積を誇ります。現在は、彼自身が後輩を指導し、農業後継者を育成するなど、新たな好循環を生み出しています。

「つなぐ」ことの価値

NPO法人の代表理事となった私が今後やるべきこと、それは中山間地域に仕事を生み出すということです。

定着できる仕事があれば、地元への定住にもつながっていきます。

人と人をつなぐことで田畑、機械、家、販路など、さまざまなチャンスが生まれ、新しい可能性が生まれます。

私の役割は今後よりコーディネート力を発揮するものに特化していくことになると思います。そして、「つなげる」ことの重要性を周りの人々にもっと認識していただけるように頑張りたいと思います。学生たちには事務局での仕事を通して活性化のノウハウを学び、それぞれの地元のために貢献してほしいと願っています。

〈取材日：平成24年5月18日〉



学生にキッカケを、 地域に笑顔を

鳥取大学農学部時代に立ち上げた 「学生プロジェクト」

私は静岡県出身ですが、鳥取大学農学部に進学しました。在学中、とりわけ思い出に残ったのが、地元の方との交流でした。

ある時、その方たちから、こんな言葉をいただきました。「君が卒業したらお仕舞いだよね、寂しいな」。

私が培ってきた人脈やノウハウを先輩たちにつなげられないか？現在私たちはNPO法人として活動していますが、この一言がきっかけとなったのです。

鳥取県でも、農業従事者は高齢化しており、田植えや水路に貯まった土砂の撤

地域との交流で、 学生も、地域も伸びていく

この取組みは地域に新たな可能性をもたらしました。農家や地域の皆さんは田植えなどのイベントで、この辺りではなかなか出会えない学生たちの協力を喜んでくれました。最初のうちは反対していた地元の人々も、最後には仲間として受け入れてくれたこともありました。

また、学生側にも変化が生まれました。これは一例ですが、コミュニケーションが苦手な学生が、祖父母と年齢が近い農家の方に心を開いて、楽しく会話をしながら働くことができました。